The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	山片蟠桃『夢ノ代』雑書篇訳注（一）
Author(s)	岸田, 知子
Citation	中国研究集刊. 2012, 54, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58050
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　崗号（総五十四号）平成二十四年六月　一―一五頁

山片蟠桃『夢ノ代』雑書篇訳注（一）

岸田知子

一、テキストは、関西大学図書館所蔵写本を底本とし、これに句読点等を施した日本思想大系（岩波書店）本を参照した。
一、漢字は常用漢字を用いた。
一、コト、ドモを記す記号はカナ表記に改めた。
一、送り仮名・振り仮名のうち片仮名は底本による。平仮名は訳注者が施した。
一、底本の欄外書き込みは（欄外：）として該当箇所に挿入した。
一、各章のタイトルは訳注者がつけた。なお、注はなるべくわかりやすく詳しく書いた。

夢ノ志呂巻之八
雑書第八

一、『史記』の配列について

揚慎①曰、「尚書首（ハジメトシ）二堯典舜典ヲ一、春秋首（トシ）二隠公ヲ一、世家首（トシ）二泰伯ヲ一、列伝首（トス）二伯夷ヲ一②、貴（ブ）レ譲（ユヅリ）③也」ト。シカルニコレ偶然ノミ。譲ヲ貴ンデ此（カク）ノゴトキニアラザル也。古書二典④ヨリ先ナルハナシ。春秋ノ起リイカンヲシラザレドモ隠公ヨリ始マルモノハ魯ノ史記⑤コノ時ヨリ委（くわ）シキナルベシ。史記ノ世家⑥呉ヨリ久シキハナシ。宋・祀⑦トイヘドモミナ武王ノ封ズル処ナリ。列伝モ亦シカリ。伯夷ヨリ先ナルハナシ。伊尹（いいん）・傅説（ふえつ）⑧ノ伝ヲ作ラバコレヲ始トスベシ。伯夷ニ始マリ管・老・司馬・孫・伍⑨コレニ次グ。ミナ大テイ年次ヲ以テスルモノ。晏・荘・申・韓・呉⑩ハ同国同徳同姓等ノ因ヲ以テ

附スルナリ。ソノ余ミナコノ類ナリ。シカルニ徳ヲ褒シ不徳ヲ貶シ、大史公⑪ノ次序⑫ヲ前後シ、サマ〳〵ノ評ヲナスコトミナ誤ナリ。孔子・陳渉ノ世家⑬ヲ始メ、ミナソレ〳〵ノ意ノ有ル処ハ大史公ノ自序⑭ニテシルベシ。遷モ亦大賢ニアラズ。大テイニミルベシ。

【注】

①一四八八～一五五九。明代の学者。字は用修、号は升菴。『升菴詩話』十四巻、『升菴文集』四十巻、『升菴外集』百巻などがある。

②『尚書（書経）』は堯典（底本では略字「尭」を用いる）・舜典を冒頭とし、『春秋』は隠公元年より始まる。『史記』の世家は呉太伯世家（太伯は泰伯のこと）を第一とし、列伝は伯夷列伝を第一とする。

③堯は舜に、舜は禹に禅譲し、魯の隠公は桓公に譲位した。周の泰伯は父大王の意志を汲んで末弟の季歴（文王の父）に後嗣を譲り、呉に行ったとされる。伯夷は弟の叔斉と嗣を譲り合って故国を出た。すべて位を譲った人を巻首においていることから、それぞれ譲位を尊重していると揚慎は考えた。

④『尚書』の堯典・舜典をいう。

⑤ここは史官の記録の意味。

⑥『史記』は前漢・司馬遷撰。司馬遷はもとの職名「太史令」に因み、自ら太史公と名乗ったから、その書は『太史公書』と呼ばれ、後漢ころから『史記』と呼ばれるようになった。『史記』百三十巻の構成は、十二本紀（帝王の伝記）、十表（年表類）、八書（専門分野の記録）、三十世家（諸侯の伝記）、七十列伝（臣民の伝記）である。

⑦「祀」は杞の誤り。宋は周の武王が殷の紂王の庶兄微子を封じた国。杞は禹の子孫東楼を封じた国。

⑧伊尹は殷の賢人。湯王を助けて夏の桀王を討ち、殷の開国に大功があった。傅説は殷の高宗の賢相。高宗が夢を見て土木工事の人夫の中から見いだしたといわれる。

⑨『史記』列伝は伯夷列伝に続き、管晏列伝第二（管仲・晏嬰）、老子韓非列伝第三（老子・荘子・申不害・韓非）、司馬穰苴列伝第四、孫子呉起列伝第五（孫武・孫臏・呉起）、伍子胥列伝第六となる。

⑩晏子（嬰）・荘子・申不害・韓非・呉起のこと。注⑨にあげたように『史記』列伝で晏嬰は管仲と、荘子・申不害・韓非は老子と、呉起は孫子（孫武・孫臏）とそれぞれ同じ列伝に配せられている。

⑪正しくは太史公。司馬遷のこと（注⑥参照）。底本で

は「大史公」と書くことが多い。

⑫順序。次第。

⑬諸侯の伝記である世家に、孔子世家第十七・陳渉世家第十八が含まれている。

⑭『史記』列伝の最後（第七十）に司馬遷の自伝「太史公自序」がある。そこには孔子と陳渉を世家に入れた理由を次のように述べている。

・周室既衰、諸侯恣行、仲尼悼礼廃楽崩、追脩経術、以達王道、匡乱世反之於正、見其文辞、為天下制儀法、垂六芸之統紀於後世、作孔子世家第十七（周室既に衰へ、諸侯恣行す。仲尼、礼廃れ楽崩るを悼み、経術を追脩し、以て王道を達し、乱世を匡し、これを正に反さんとし、其の文辞を見はし、天下の為に儀法を制し、六芸の統紀を後世に垂る。孔子世家第十七を作る。）

・桀紂失其道而湯武作、周失其道而春秋作、秦失其政、而陳渉発迹、諸侯作難、風起雲蒸、卒亡秦族、天下之端、自渉発難、作陳渉世家第十八（桀・紂、其の道を失ひて湯・武作り、周、其の道を失ひて春秋作る。秦、其の政を失ひて、陳渉、迹を発し、諸侯、難を作して、風起こり雲蒸し、卒に秦族を亡ぼす。天下の端、渉より難を発す。陳渉世家第十八を作る。）

【現代語訳】

楊慎がいう、「『尚書』は堯典・舜典を、『春秋』は隠公を、『史記』世家では泰伯を、列伝では伯夷を最初にあげているが、これは「譲ること」を尊重するからである」と。しかし、これは偶然にすぎない。「譲ること」を尊重してこのようになっているのではない。堯典・舜典よりも古い書はない（だから最初にあるのだ）。『春秋』がどのようにしてできたかはわからないが、隠公から始まるということは、魯の史官の記録がこの時から詳しくなったということであろう。『史記』の世家（で取り上げる諸侯国）で呉より古くからあるものはない。宋や杞といっても、どちらも周の武王が封じた国である。列伝も同様である。伯夷より以前の人はいない。伊尹や傅説の列伝が作られていれば、これらを初めとすべきであったろう。伯夷から始まって、管仲・老子・司馬穰苴・孫子・伍子胥の列伝が続いている。みな、たいてい年代順で並んでいる。晏子・荘子・申不害・韓非・呉起は、同じ国であるとか同程度の徳性であるとか同じ姓などの理由で、上記の列伝に配されている。そのほかもみなこの類である。だから、徳をほめ不徳を貶し、それによって司馬遷の並べた順序を前後させたり、さまざまな評価をすることは、みな誤りである。孔子世家や陳渉世

家を始めとして、どれにもそれぞれの意図があることは、太史公自序にて知ることができる。司馬遷も大賢人ではない。ほどほどに見るべきである。

二、君子の細心

楽正子春、足ヲ破リテ、孝ヲ忘レタルヲ憂フ①。甚シキニ似タリ。シカルニ君子ハ精白紙ノゴトシ。小人②ハ紺紙ノコトシ。ソノ余ノ中人ハ、黄アリ、青アリ、碧緑アリ、赤紅アルガゴトキ也。ソノ白紙タルヤ、一点ノ墨付タレバ精紙ニアラズ。自カラ憂フベシ。傍人モ亦コレヲ惜ミ、穢タリトス。君子ノ小過ヲ憂フルコトカクノゴトシ。小人ノ紺紙ニ一点ノ白キアレバ、此ヲカザリテ、世ニモ珍シク思ヒテ人ニホコル。ソノ満紙ニ墨ヲコボストイヘドモ、ツイニ憂トセズ。亦コレヲ見分ツコトナシ。或ハ青・黄・碧・赤ノ紙ニ至リテハ、小疵ヲウケテ憂フルコトナク、小白ヲウケテ誇ラズ。少シニテモ濃ニ至レバ、尚サラニ大疵ヲイトハズ。ダン〳〵ト淡キホド、イヨ〳〵小悪ヲオソル。ユヘニ君子ハ、不正ノ色ヲ視ズ、不正ノ言ヲ聴ズ、不正ノコトヲ云ハズ、不正ノ地ヲ踏ズ③シテ唯戦々兢々トシテ薄氷ヲフムガゴトシ、深淵ニ臨ムガゴトク④ニシテ汚サレントスルヲ恐ル。小人ノコレニ反スルヤ、只人ヲ聖賢トミルユヘニ、一点ノ疵アレバコレヲ非リ、人ヨリ恵ヲ懐ヒ⑤安ヲ懐ヒ、我ニ向ヒテ少シク怨⑥セザレハ、ソノ人ヲ責メ、唯モノ⑦人ヲ君子トセントス。サテ又己ヲ愚蒙ノ人トミルユヘニ、大疵アリテモ人ノ正スヲ怨⑧リ、人ヲ恵マズ、人ヲ安ンゼズ。人ニ向ヒテ怨スルコトナク、我マヽニシテ己ヲ小人トセントス。水戸黄門君⑨曰、「主ハ無理云モノト思フベシ、臣ハ行トヾカヌモノト思フベシ」。ユヘニ我曰、「人ハ小人ト思フベシ、行トヾカヌモ理ナリ。人ハ盗賊ト思フベシ。盗マザレバ君子ナリ。己ハ君子ト思フベシ。盗ミタラバ賊ナリ。ツヽシムベシ。己ハ君子ト思フベシ。行トヾカザレバ小人ナリ。ツヽシムベシ」。コレ行往坐臥ノ功夫⑩怠ラズシテ、ツイニ楽正子春ノ城⑪ニ至ラバ、何ヲカ怨ミン。何ヲカ恐レン。

【注】

①楽正子春は曾子の弟子。『礼記』祭義篇に次のようにある。「楽正子春下堂而傷其足、数月不出、猶有憂色、門弟子曰、夫子之足瘳矣、数月不出、猶有憂色、何也、楽正子春曰、善如爾之問也。善如爾之問也。吾聞諸曾子、曾子聞諸夫子、曰、天之所生、地之所養、無人爲大、父母全而生之、子全而帰之、可謂孝矣、不虧

其体、不辱其身、可謂全矣、故君子頃歩而弗敢忘孝也、今予忘孝之道、予是以有憂色也」（楽正子春、堂より下りて其の足を傷つけ、数月出でず、猶ほ憂色有り。門弟子曰く、夫子の足瘳えり。数月出でず、猶ほ憂色有り。何ぞやと。楽正子春曰く、善なること爾の問の如し。善なること爾の問の如し。吾れこれを曾子に聞く。曾子これを夫子に聞く。曰く、天の生ずる所、地の養ふ所、人より大爲る無し。父母全ふしてこれを生じ、子全ふしてこれを帰す。孝と謂ふべし。其の体を虧かず、其の身を辱しめず。全ふすと謂ふべし。故に君子は頃歩して敢へて孝を忘れざるなりと。今、予は孝の道を忘る。予是を以て憂色有るなりと）。「頃歩」とは半歩。また頃は片足を、歩は両足を進めること。転じて、ごくわずかな行動をいう。

②有徳者を意味する君子に対応する語で、徳のない者、つまらない者。

③『論語』陽貨篇に「子曰、悪紫之奪朱也、悪鄭声之乱雅楽也、悪利口之覆邦家」（子曰く、紫の朱を奪ふを悪む。鄭声の雅楽を乱すを悪む。利口の邦家を覆すを悪む）とある。また、『淮南子』説山訓には「曾子立廉、不飲盗泉、所謂養志者也」（曾子 廉を立て、盗泉を飲まず、所謂志を養ふ者なり）とあり、『後漢書』鍾離意伝には「孔子忍渇於盗泉之水」（孔子 渇きを盗泉の水に忍ぶ）とある。

④『詩経』小雅・小旻に「戦戦兢兢、如臨深淵、如履薄冰」（戦戦兢兢として、深淵に臨むが如く、薄冰を履むが如し）とある。おそれ慎むさまをいう。ここは『論語』泰伯篇に次のようにあるのに基づく。「曾子有疾、召門弟子曰、啓予足、啓予手、詩云、戦戦兢兢、如臨深淵、如履薄冰、而今而後、吾知免夫、小子」（曾子疾有り。門弟子を召して曰く、予が足を啓け、予が手を啓け。詩に云ふ、戦戦兢兢として、深淵に臨むが如く、薄冰を履むが如し、と。而今よりして後、吾れ免るることを知るかな、小子、と）。「小子」は弟子たちに呼びかける言葉。また、『孝経』には「身体髪膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也」（身体髪膚、これを父母に受く、敢えて毀傷せざるは、孝の始めなり）とあるが、これは『論語』や『礼記』の曾子のエピソードに基づいての記述と思われる。

⑤『論語』里仁篇に「子曰、君子懐徳、小人懐土、君子懐刑、小人懐恵」（子曰く、君子は徳を懐ひ、小人は土を懐ふ。君子は刑を懐ひ、小人は恵を懐ふ）とある。

⑥ゆるす。大目に見る。

⑦「直物」と書く。やたらに。ひたすら。

⑧「怒」の書き誤り。

⑨水戸藩主徳川光圀（一六二八～一七〇〇）。唐の門下省の次官を黄門侍郎といい、その職掌に似ていること

から中納言を黄門と呼び、中納言であった徳川光圀をさす。儒学を奨励し、彰考館を置き『大日本史』を著した。

⑩工夫と同じ。

⑪「域」の書き誤り。

【現代語訳】

楽正子春が足を傷つけ、孝を忘れていたことを悩んだ。これは行き過ぎといえよう。しかし、君子は真っ白な紙のようなもので、小人は紺色の紙のようなものである。その他の中間の人は、黄色や青や青緑や赤の色の紙があるようなものだ。白い紙は、一点の墨が付いただけで精白紙ではなくなる。本人自身もそうなったことを悩み、そばの人たちもまた穢れてしまったことを残念がる。君子が小さな過ちを心配するのはこのようなものだ。小人の場合、紺色の紙に白い一点があれば、これを飾って、世にも珍しいものだと思って人に誇る。その紙の全体に墨をこぼしたとしても、これを心配しない。また、これを見分けることもできない。あるいは青・黄・緑・赤の紙の場合は、小さなキズを受けたところで心配することもなく、小さな白い点があっても誇らない。少々のキズがあっても濃い色になるほど、なおさら大きなキズを厭わない。だんだんと薄い色になればなるほど、ますます小さなキズを恐れる。だから君子は、不正の色を視ず、不正の言を聴かず、不正のことをいわず、不正の地に足を踏み入れず、ただ戦々兢々とおそれつつしみ、薄氷を踏むように、深い淵に臨むようにして、我が身を汚されることを恐れるのである。

小人はこれに反して、ただひとえに人を聖賢として見るから、一点のキズがあればこれを非難し、人から恩恵を得ようと思い、安楽を得ようと思い、自分を大目に見ない人がいれば、その人を責め、ひたすら人を君子と見なそうとする。一方、自身を愚か者と見ているから、大きなキズがあっても人が正すのを怒り、人に恩恵や安楽を与えない。人に向かって寛容にならず、わがままで自分を小人と見なそうとする。

水戸黄門公は「君主は無理をいうものと思うべし。臣下は行き届かないものだと思うべし」と言った。だから、私は次のように言おう、「人は小人だと思うべし。行き届かないのは当然である。人は盗賊だと思うべし。盗まなかったら君子である。自分は君子だと思うべし。盗んだら盗賊になってしまうから、慎むことができる。自分は君子だと思うべし。行き届かなければ小人になってしまうから、慎むことができる」と。これを日常のど

んな場合でも工夫を怠らないようにし、楽正子春の域に達すれば、何を怨むことがあろうか。なにを恐れることがあろうか。

三、五行災異

史記八書①ノ内、歴書②・天官書③ナドノ妄誕云ベカラズ。大史公④ノ時ノ天学ハカ、ルモノナリ。ソノ余五行・陰陽・鬼神・仙術⑤ニ渉ル書ルイ、且医書ノルイ用ユベカラザルコト多シ。ミナコレ古書ノコトユヘニソノマ、ニテ措テ論ゼズシテシカルベシ。我神代ノ書モ亦シカリ。スベテ大部ノ書ハ煩雑多シ。孟子曰、「尽〳〵信レ書ヲ、不レ如カレ無キニレ書」ト⑥。コノ語、拳々服膺⑦シテ書ヲヨムベシ。シカリトイヘドモ初学ヨリ疑ヲ抱キテ学ブベキニアラズ。ダン〳〵ト熟シテソノ智、明ラカニナリタラバ分ルベシ。然リトイヘドモ、史記ニ限ラス、班固ノ漢書⑧ヨリシテ歴代ノ諸書、凡五行災異⑨ニカ、リタルコトハ、ミナ杜撰妄説多シ。蓋シ五行災。⑩異端ノ一流ノアリテ、讖緯⑪ヲトリマゼテ世ヲ惑ハス。漢ノ寸大ニ行ハレ、儒学ノ中ヘマジリ込テ、天下公共ノ道トナリテ、此ヲ断然ト攘斥⑫スル人少シ。人ニヨリ好不好ノ浅深アルノミニテ、一向ニトリ上ザル学者ナシ。程朱⑬ニテモ少シヅ、ハコノ病アリ。況ヤソノ他ヲヤ。我邦ノ先輩トイヘドモミナシカリ。今ノ世ニテモコレヲ信ゼズ破ルモノハ中井ノ門⑭ノミ。世上ハミナ浅深ノ惑ヲ免カレズ。ツイニハ神仏ニ陥リテ救フベカラザルモアル也。ユヘニ古書ノミニアラズ。医術ノ中ニ五行ヲ取サルハ後藤・山脇・吉益⑮ノ数流ノミ。ソノ余ハ五行ニ泥マザルハナシ。古聖賢ノ天ト云ハ多クハ己ヲ慎ムノ方ヨリ出ル。畏レ天ヲ⑯ノルイ天譴⑰ノルイコレナリ。又古来ヨリ論シタルコトナレバ何レノ論モ捨ザルガヨシト云、長者温厚ノ論ニテ、コノ長者ノ惑ヒ牢シテ解ベカラズ。スベテ学者ノ内ニ力行⑱ヲツトメ実学⑲ノ人ハ、五行災異ヲ事トセズ。実ニ疾病ヲ治スル医ハ亦五行ニ泥マズ⑳。実ニ日月星辰ヲ推歩㉑スル天学者ハ亦五行災異ニ惑ハザル也。ミナ浅学ニシテソノ実地ヲ知ザル人ノコトナリ。ミナコレ小人儒㉒ノアヤマリナリ。

【注】

①礼書・楽書・律書・暦書・天官書・封禅書・河渠書・平準書がある。

②正しくは暦書。暦の沿革や司馬遷が作成に携わった太初暦について記したもの。

③天文と政治の相関関係、それによる吉凶禍福を記した

もの。

④司馬遷の就いていた太史令は、天文暦算・歴史をつかさどる太史の長官であった。

⑤五行は木火土金水をいい、万物はすべて五行の性を持ち循環するとする。陰陽は、万物は陽（明るく大きく強い）と陰（暗く小さく弱い）に区別されるとする考え方。鬼神とは死者の霊魂。仙術は不老長生を得て神仙（仙人）になる術をいう。

⑥『孟子』尽心下。その一節は次の通り。「孟子曰、尽信書、則不如無書、吾於武成、取二三策而已矣、仁人無敵於天下、以至仁伐至不仁、而何其血之流杵也」（孟子曰く、尽く書を信ずれば、則ち書無きに如かず。吾れ武成に於いて、二三の策を取るのみ。仁人は天下に敵無し。至仁を以て至不仁を伐つ、而何ぞ其れ血杵を流さんや、と）。ここの「書」は『尚書（書経）』を指す。策は竹簡。

⑦『中庸』に「得一善、則拳拳服膺、而弗失之矣」（一善を得れば、則ち拳拳服膺して、これを失はず）とある。両手でものを捧げ持つように、常に心に抱いて忘れずに守ること。

⑧『漢書』は後漢の班固撰。勅を奉じて『史記』にならって書かれた。以後、同様にして歴代に書かれた史書を正史という。

⑨陰陽五行説と災異説。災異説は自然災害や異常現象が天の譴責であるとする思想。その思想に陰陽五行説が組み込まれ、漢代に流行した。『漢書』五行志には過去の事件を災異説で解釈する具体例が列挙されている。

⑩本文中の「。」の右に「。異ト云」の書き込みがある。ここにこの三字が抜けているという意。

⑪前漢から後漢にかけて流行した未来予言説。讖は未来予言のこと。緯は緯書のことで、経書を漢代に流行した神秘思想（天人合一説・災異説など）をもって解釈した書。易緯・書緯・詩緯・春秋緯・孝経緯など。

⑫この二字の左に「シリゾクル」と書き込みがある。排斥する意。

⑬二程子すなわち北宋の程顥（明道）・程頤（伊川）と南宋の朱熹（朱子）。朱子は二程子の影響を受けて朱子学を大成した。

⑭大坂の懐徳堂の中井一門。

⑮後藤艮山・山脇東洋・吉益東洞。後藤艮山（一六五九～一七三三）は日本古方派の祖といわれる。山脇東洋（一七〇五～一七六二）は、実験医学の先駆者。刑死体を解剖、その結果を「蔵志」に記述し旧説の誤りを指摘した。吉益東洞（一七〇二～一七七三）は、中国の古医方を研究し、親試実験を重んじて、科学的な

医学研究の道を開いた。なお、古方派とは江戸時代の漢方の医家の流派。思弁的観念的傾向を強めた金・元以後の医学（後世派）を批判し、経験と実証を重んじる古代医学の精神に基づいた治療の改革を主張した。江戸前期の名古屋玄医に端を発し、後藤艮山により確立され、山脇東洋・吉益東洞らがこの派に属する。

⑯『孟子』梁恵王下。その一節は次の通り。「以大事小者、楽天者也、以小事大者、畏天者也、楽天者保天下、畏天者、保其国、詩云、畏天之威、于時保之」（大を以て小に事ふる者は、天を楽しむ者なり。小を以て大に事ふる者は、天を畏るる者なり。天を楽しむ者は天下を保ち、天を畏るる者は其の国を保つ。詩に云ふ、天の威を畏れて、時にこれを保んず、と）。引用された詩は『詩経』周頌・我将篇。

⑰譴の左に「セメ」と書き込みがある。譴責、とがめ。

⑱努力して実行する。

⑲実用の学問。理論より事実を重んじ、実際に役立つ学問。朱熹『中庸章句』序に「其味無窮、皆実学也」（其の味、窮まる無し。皆な実学なり）とある。

⑳拘泥しない。

㉑日月五星の運行を推して暦を作るをいう。いわゆる「天文推歩之術」。

㉒『論語』雍也篇に「子謂子夏曰、女爲君子儒、無爲小人儒」（子、子夏に謂ひて曰く、女、君子の儒と為れ。小人の儒と為ること無かれ）とある。

【現代語訳】

『史記』八書の中で、暦書・天官書などのでたらめぶりは口にすることもできない。太史公の時代の天文学はこのようなものだったのである。そのほか五行・陰陽・鬼神・仙術に関わる書の類、また医書の類は用いることができないものが多い。みなこれらは古い書なので、そのままにしておいて論じないでおくべきである。我が日本の神代の書も同様である。すべて大部の書には煩雑なところが多い。孟子も「すべて尚書を信ずるならば、尚書はないほうがよい」という。このことばを大事に胸に銘記して書物を読むべきである。

しかしながら、入門当初より疑いを抱いて学ぶべきではない。だんだんと学問が熟していき、知識が明らかになっていくとわかるだろう。そうではあるが、『史記』に限らず、班固の『漢書』以降の歴代の諸書においても、すべて五行災異に関したことは、みな杜撰ででたらめが多い。

思うに、五行災異という異端の流派があって、讖緯説を取り混ぜて世を迷わせた。漢代に大流行し儒学の中に

混入して天下公共の道となったため、これをきっぱりと排斥する者は少ない。人によって好き嫌いの程度の差があるだけで、全く採り上げない学者はいない。程子や朱子でさえ少しずつこの欠点を持っている。まして、そのほかの学者においてはなおのことだ。

日本の先輩学者といってもみな同様である。現在、これを信じないで打破するのは中井一門だけである。世の中では、みな程度の差はあれど迷いから免れていない。中には神仏にはまり、救うことができなくなってしまったものもある。そういうわけで古い書物だけに限らないのである。医術のうちで五行を採用しないのは、後藤・山脇・吉益の数流だけである。そのほかは、五行にこだわっていないものはない。

昔の聖賢が「天」を持ち出すのは、多くは自分自身を慎むことから出てくる。「天を畏る」の類や「天譴」の類がこれにあたる。また、古来から論じられてきたことなので、どの論も捨てないほうがよいというのは、年長者の温厚な論であるが、この年長者の迷いはとても堅固であるから解くことはできない。

すべての学者のなかで、努力実行して実学につとめる人は、五行災異を問題にしない。実際に病気を治療する医師も同様に五行には拘泥しない。実際に太陽や月や星を観測して暦を作る天文学者も、五行災異には迷わないのである。迷うのは、みな学問に浅く、実際のことを知らない人である。みなこれは小人儒の誤った考えである。

四、タメと読む「為」

為ノ字、「タメ」トヨムコトハ少シ。「タメ」ハ去声①也。「為レ人ノ」「為レ己ノ」「為レ君ノ」「為レ父ノ」ノ類ノミナリ。ユヘニ四書ノ註ミナ「タメ」ト云寸ハ去声トス②。「スル」「ナス」「ナル」「ヲサムル」等ノトキハ、ミナ平声ニシテ本音ナリ。ユヘニ音註ナシ。「為ニ一一ノ所一レ一スル」ト云トキハ、ミナ平声ナリ。シカレバ「為ニ一一ノ一所レトセ③」トハヨムベカラズ。シカルニ我邦カクヨミ来レリ。コノコトニ心付タルハ我中井氏ノ門ノミ。コノ始ハ十八史略ノ音註ニ去声トセシヨリ来ルナラン④。大日本史⑤此誤リヲヲソヒテ、「為ニ一一ノ一見レ一セ」ト云コト多シ。所・見ノ差ヒ大ニ過レリ。為ヲ平声ニヨメハ所ハ「トコロ」トヨミテ、「ラル」トヨマズ。（欄外：所ノ字ニ「ラル、」ノ意ナシ。）見ハ「ラル、」ノ外ヨムベカラズ。孟子ニ「盆成括見レ殺サ」⑥ハ上ニ為ノ字ナシ。漢文ニ為ノ字上ニアレハ、下ニ所ノ字アリ。見ヲ用ヒタル

例ナシ。（欄外：史記ニ上ニ為アリテ下ニ所ナキアリ。コレハ去声也。）又上ニ為ノ字ヲヲキテ「誰ノ為ニ殺サル」トヨムトキハ、「誰ニコロサル」ト云コトニナル。（欄外：「ニ」ト云ハ、タレニコロサルト云コトナリ。）シカレドモ為ノ字、和文ニ「ニ」ニアタルコトナシ。「君ガタメ」、「誰ガタメ」トノミニテ、決シテ「ニ」ノ所ニ用ヒザルナリ。漢ニテハ音ニテヨミ下スユヘ、日本ノ点ヲツケテカヘリヨミニスルトハ大ニ異ナリ。カヽル処ニテ心得タガヒ多シ。

【注】

①漢字の発音には四つの声調（平声・上声・去声・入声）がある。去声は終わりが下がり弱くなる発音のしかたをいう。現代中国語の四声とは異なる。

②「四書ノ註」は四書（『論語』『孟子』『大学』『中庸』）の朱子の註をいう。「為」を「タメ」と読む場合に去声とする一例は以下の通り。『論語』先進「季氏富於周公、而求也、為之聚斂而附益之（朱注）為、去声」

③「ト」は「ー」の書き誤り。

④『十八史略』は元の曾先之が『史記』以下、十八の史書から重要で興味深い話を集めた書。「十八史」は『史記』『漢書』『後漢書』『三国志』『晋書』『宋書』『南斉書』『梁書』『陳書』『（北）魏書』『北斉書』『北周書』『隋書』『南史』『北史』『新唐書』『新五代史』の正史「十七史」に『続宋編年資治通鑑』『続宋中興編年資治通鑑』を一つに数えて加えたもの。『十八史略』で「為―所―」の「為」に「去声」と音註した例をあげておく。「審食其従太公呂氏間行、遇楚軍、為楚所獲、常置軍中為質（注）為楚之為、去声」（西漢篇）

⑤徳川光圀撰。神武天皇から後小松天皇までの歴史。三九七巻。漢文の紀伝体。一六五七年に史局を設けて着手、光圀没後も編集を続け、一九〇六（明治三九）年完成。

⑥『孟子』尽心下。

【現代語訳】

為の字を「ため」と読むことは少ない。「ため」の場合は去声である。「為人（人のため）」「為己（己のため）」「為君（君のため）」「為父（父のため）」の類だけである。だから朱子の四書の註では、どれも「ため」と読むときは去声としている。「する」「なす」「なる」「おさむる」等のときは、みな平声であって、それが本来の音である。だから、その場合は音注がない。

「為―所―（―の―する所と為る）」というときは、み

な平声である。だから、これを「―の為に―せ所」とは読んではいけない。それなのに我が国ではこのように読んできたのである。このことに気づいていたのは我が中井一門だけである。この始まりは、『十八史略』の音注で為を去声としたことに由来する。『大日本史』がこの誤りを引き継ぎ、「―の為に―せ見る」ということが多い。所と見の違いを大いに誤っている。

為を平声に読めば、所は「ところ」と読んで、「らる」とは読まない。（欄外：所の字に「らるる」の意味はない。）見は「らるる」のほかに読むことはできない。『孟子』にある「盆成括見殺（盆成括殺さる）」は、上に為の字がない。漢文で（受け身の表現の場合）為の字が上にあれば、下に所の字がある。（為が上にあって下に）見を用いた例はない。（欄外：『史記』に、上に為があって下に所がないものがある。これは去声である。）

また、上に為の字を置いて「誰の為に殺さる」と読むときは、「誰に（よって）ころされた」ということになる。（欄外：「に」というは、だれに殺されたということである。）しかし、為の字は、和文において「に（よって）」に当たることはない。「君がため」「誰がため」というのみで、決して「に」の所に用いない。中国では音で読み下すから、日本の返り点をつけて返読するとはずいぶんと違う。このようなところに心得違いが多い。

五、『蒙求』

蒙求①ノ「鮑靚記シレ井ヲ」②「羊祜識レ環ヲ」③ノ語（欄外：トモニ晋書）及ビソノ余妄説多シ。スベテ蒙求・世説④ノルイハ俗書ニシテ儒書ニアラズ。野乗⑤・卑説⑥ヲ采コト多シ。（欄外：世説・蒙求ハミナ出処アリテ歴史及ヒ卑説ヲ用ユ。）大テイ仏法中国ニ入タル後ノ書ハ、カヽ俗説多シ。堯・舜・孔・孟ノ道ヲ述タル書コソ儒書ト云ベシ。シカルニ我邦ニテハ四角ナル字ノ書冊ハ、ミナ儒書ト思ヘリ。中古文学⑦行ハレシ寸モ詩文・歴史ヲ主トシ、ソノ余俗書ヲヨミテ、四書五経ヲ熟読シタル人少シ。ユヘニ勧学院ノ雀モ論語ヲサヘヅラズシテ、蒙求ヲサヘヅル⑧。ヲシムベキカナ。大テイコノ時分ノ学者ハミナコノ雀ノ師ナリ。

【注】

①書名。李瀚（唐末～五代後晋）撰。古人の逸話を類集したもので、たとえば「孫康映雪、車胤聚蛍」（孫康は雪に映じ、車胤は蛍を聚む）のように、こどもが記憶しやすいように類似する逸話を四字句の対句にしてある。

書名は『易経』蒙卦に「童蒙求我」とあるのに基づく。

②『晋書』巻九十五芸術伝（芸術は卜祝筮匠の技をいい、芸術伝は『晋書』『周書』『北史』『隋書』にある）「鮑靚字太玄、東海人也、年五歳、語父母云、本是曲陽李家児、九歳墜井、其父母尋訪得李氏、推問皆符験」。鮑靚は五歳のとき、父母に自分はもとは曲陽の李家の子で、九歳のとき井戸に落ちたと語った。父母が李家を訪ねると鮑靚の言った通りであった。

③『晋書』巻三十四「羊祜字叔子、泰山南城人也、世吏二千石、至祜九世、並以清徳聞、（中略）祜年五歳、時令乳母取所弄金環、乳母曰、汝先無此物、祜即詣鄰人李氏、東垣桑樹中探得之、主人驚曰、此吾亡児所失物也、云何持去。乳母具言之、李氏悲惋、時人異之、謂李氏子則祜之前身也」。泰山南城の名家の九世にあたる羊祜は、五歳のとき乳母におもちゃにしていた金の環を持ってこさせようとした。乳母がそんなものはないといったので、隣の李家に行き、東の垣根の桑の木を探すと出てきた。李家の主人が驚いて、これはうちの子がなくした物、どうして持って行くのかといった。乳母がわけをいうと、李氏は嘆き悲しんだ。つまり李家のこどもが羊祜の前身だったのである。

④『世説新語』。南朝宋の劉義慶撰。後漢から東晋までの名士の逸話を集めた書。

⑤民間私撰の歴史書。稗史、私史、野史ともいう。「乗」は記載の意。

⑥取るに足りない俗説。小説と同義。六朝時代は珍しい事象を書き記した志怪小説や人物をめぐる志人小説が流行した。

⑦この「文学」は学問の意。岩波本は「文字」としている。

⑧勧学院は、八二一（弘仁十二）年、藤原冬嗣が大学寮に学ぶ一門の子弟の寄宿舎として創立し鎌倉時代まで存続したものであったが、一方、大寺院の山内に設ける学僧養成の施設をもさすようになった。「勧学院の雀は蒙求を囀る」とは、学僧が『蒙求』を読むのを雀が聞き覚えてこれをさえずるという意で、常に聞き慣れていることは自然に覚えることをいう。「門前の小僧習わぬ経を読む」と同意。

【現代語訳】

『蒙求』の「鮑靚記井」「羊祜識環」の話（欄外：ともに『晋書』に拠る）、およびその他の話にはでたらめなものが多い。すべて『蒙求』や『世説新語』の類は、俗書であって儒書ではない。民間で作られた俗史俗説から採ったものが多い。（欄外：『世説新語』や『蒙求』の話

にはどれも出典があって、歴史や俗説を用いている。）

たいてい仏教が中国に入ったのちの書は、このような俗説が多い。堯・舜や孔・孟の道を述べた書こそ儒書というべきである。しかし我が国では、四角い文字（漢字）の書物はどれも儒学の書であると思われていた。中古（平安時代）になって、学問が広く行われるようになったときも、詩文や歴史が中心で、その他は俗書を読んでいて、四書五経を熟読した人は少ない。だから勧学院の雀も、『論語』をさえずらないで『蒙求』をさえずるのだ。惜しいことだ。たいていのこのころの学者はみなこの雀の師匠である。

六、利と義

アル時宴集①ニ対②ヲ論ズ。曰、「吉凶ハ③善悪・表裏・上下・得失・損益・君子小人」ヨリ、ツイニ利害ニ至ル。先生④曰、「コレマデノ対ハミナ然リトイヘドモ、利害ヲ以テ対トスベカラズ。諸賢コノ心ユヘ、ツ子ニ行ヒヲ汚スコト多シ。利ノ対ハ義ナリ。利ヲ見レバ義ヲ見ルニ暇アラズ。ユヘニ利義ヲ以テ対トスベシ。孔子「見レ得ヲ思フレ義ヲ」ト云⑤。孟子「何必曰フレ利ト、亦有ルニ仁義一而已」ト云⑥。得ヲミルハ利ナリ。コノ時、義ヲ思ハザレバ利ニクラマサルベシ。仁義トイハズシテ利ト云トキハ、亦利ニ泥ムナリ。ユヘニ利ノ対ハ義ナルベシ。利害ヲ以テ対トスル人ハ、ツ子ニ害ヲサケテ利ニ走ルナリ。スベテ利ノ字、己ニ用ユレバ凶ナリ。人ニ用ユレバ吉ナリ。コレヲ味フベシ」ト。

【注】

①宴会。

②二つそろって一組になるもの、対応関係にあるものをいう。

③「ハ」は書き誤りで、不要である。

④中井竹山を指す。

⑤『論語』季氏篇と子張篇にある。また憲問篇には孔子の言葉として「見利思義」が見られる。

⑥『孟子』梁恵王上。

【現代語訳】

あるときの宴会で「対」について論談した。「吉凶・善悪・表裏・上下・得失・損益・君子小人」とあげていって、「利害」に至った。竹山先生は次のようにいわれた、「これまでの対はどれもその通りであるが、利と害を対としてはいけない。皆さんがそういう心でいるか

ら、いつも行いを汚してしまうことが多いのだ。利の対は義である。利を目にすると義を見るひまがなくなる。だから利と義を対とすべきである。孔子は『得るを見ては義を思ふ』といい、孟子は『何ぞ必ず利を曰はん、亦た仁義有るのみ』といわれた。（孔子の言葉の）「得るを見る」とは利のことである。このとき、義を思わなければ利にくらまされてしまうだろう。（孟子が）「仁義をいわないで利だけをいう」というのも、利に拘泥していることをいうのである。だから利の対は義でなければならない。利と害を対とする人は、いつも害を避けて利に走る。すべて利の字は、（利己のように）自分に用いると凶になり、（利他のように）人に用いると吉になる。これも味わうべきである」と。